

総合計画審議会委員からの意見整理

(第1回～第2回、第2回会議後の書面意見)

総合計画審議会委員からの意見整理

No.	委員名	意見内容	会議
1	秋元委員	2030年に女性が活躍しているというイメージ、ビジョンが決まっているのか。女性の活躍といっても広義。キャリアの人、家を守る人、稼ぎたい人、いろいろいるわけだが。女性活躍のビジョンを教えてください。	第2回
2	秋元委員	女性活躍という言葉に違和感がある。女性活躍とは、どういうことなのか。女性が求めているものは活躍ではなくて、ライフスタイルを選択しやすいかどうか。働きたいのに時間の融通が利かないから働けない、保育園に預けられない、または働きたくなくて主婦やってるから満足などさまざま。	第2回
3	有賀委員	2030年の小田原の姿というのは、子供たちにとっては抽象的で漠然としている。もう少し分かりやすいテーマ設定や、イメージしやすい工夫が必要ではないか。	第2回
4	出石委員	KPI、目標値について、立てた数字があっさり達成できた、3年間の目標で立てたが1年目で倍ぐらいできてしまった、一方でどう考えても達成できないというケースなどもある。KPIは、計画を動かしながらいじっても良いと思う。確かに、評価をした中で、結果に対して次頑張るぞでも良いが、明らかに達成できない目標あるいは反対に達成できてしまう目標というものは気を付けていても発生してくる。社会情勢に合わせて目標値を柔軟に軌道修正することも考えられる。	第1回
5	出石委員	15頁の2-(2)「地域経済の好循環」の記述について、前回も若干意見が出ていましたが、「起業の促進」、「起業家意識の醸成」といった観点を打ち出したほうが良いのではないのでしょうか。文中にある「産業の創出」とは趣旨が異なります。	第2回後の書面
6	出石委員	17頁の3-(1)「行政経営」中に「経営資源(人・モノ・金)」との記述がありますが、「情報」も経営資源に含めたほうが良いのではないのでしょうか。	第2回後の書面
7	遠藤委員	イラストで2030年の姿を募集するということが、募集方法が絵だけにすると、得意な子、絵に興味がある子に絞られてしまうのではないかと。歌でも俳句でも文章でも良いという形で、広く募集をすべきでは。また、もう少しテーマを絞ることで、そこで自分の力を引き出せるのではないかなと思う。	第2回
8	遠藤委員	地域経済の好循環の、2030年の姿の●の1個目について、テレワークや働き方の多様化が進むことで、働くことだけが転入の意味にならない時代が来ると思う。働き方の多様化で働くところが小田原市にあるから住む場所として小田原市を選ぶということが、現実的じゃなくなってくると思う。仕事とか雇用とか、+αで小田原市に住む意味が必要になってくる。少し多角的な視点で見られると良いのではないかと。	第2回
9	遠藤委員	国内外の人たちが、行ってみたい、住んでみたいと憧れ、そして住む人に住み続けたいと思ってもらえる「世界が憧れるまち“小田原”」とありますが、「行く」と「住む」はターゲットやアプローチが全く違ってくると思います。どちらが重点的なののでしょうか？	第2回後の書面
10	遠藤委員	「世界が憧れるまち“小田原”」になるには、外からの視線が必要かと思えます。例えば神奈川県内の別地域の住民が小田原に対してどう思っているかなど、調査をした実績やデータはありますか？	第2回後の書面
11	遠藤委員	基本構想を全て確認させていただきましたが、抽象的であり、仮に他の地域にこの基本構想を当てはめたとしても成立するよう内容になってしまっているように感じます。小田原市ならではの発信をしなければ世界から憧れる地域にならないと思えます。ただ、基本構想なので、今後議論になる実行施策が、本当に小田原が世界から憧れるまちになるための施策になっているかが非常に重要になると思えます。	第2回後の書面
12	奥委員	資料5の最後の9ページでお話いただいた、市民等との対話の場について、若者として想定されているのはどれくらいの年齢層か。今後の小田原を担うということを考えると、できるだけ小学生や、より若年層の意見も聴き、もしくは小田原をどういうふうにしていきたいのかというような子ども達の意見を聞いていただきたい。	第1回
13	奥委員	生活の質の向上について、「子育てに夢や希望が持てるまちを目指します」とあり2030年の姿にも「子育てに夢や希望が持てるまち」という表現がある。これは、「夢や希望を持って子育てができるまち」という方がよいのではないかと。それと同時に、ここで書いてあることは子育てをする親の立場での記述となっている。子どもたち自身が夢や希望を持って育つことができる、そういう環境を整えていくということが重要だと思う。子どもの声にしっかりと耳を傾ける、子どもの声をしっかりと聞き、子どもをその、個として尊重するという姿勢が表現される必要があるのではないかと。子どもの立場からの視点で記述を加えていただきたい。	第2回
14	奥委員	「公共交通をはじめ地域の移動手段の維持確保とデジタル化による利便性の向上により誰もが気軽に家の外に出ていける環境が整備されている」とあるが、デジタル化による利便性の向上によって、家から出なくても、情報を得たり、用が足せたり、会議もできたり、人々と交流できるという環境が急速に整いつつある。家の外に出ていける環境だけではなく、その逆もあるということ。デジタル化による利便性の部分をもう少し分けて書いた方がいいのではないかと。	第2回
15	奥委員	「多様な森林空間が利用され」とあるが、森林空間も当然重要だが、小田原市は森、里、川、海が「ひとつらなり」というところが、重要な特徴としてある。多様性に富む自然空間といった表現の方が良いのではないかと。	第2回
16	奥委員	推進エンジンについて、公民連携・若者女性活躍というところで、若者と女性だけが活躍すればいいというわけではない。文中の最後にある、「年齢、性別に関わらず(誰もが)チャレンジし、活躍できるまち」を将来目指しているわけなので、何故若者と女性だけにフォーカスするのか、若者と女性以外がむしろ排除されてしまうのではないかと、そういう印象も与えてしまうような気がする。もう少し、「市民活躍」という言葉など、年齢や性別に関わらず、誰もが柔軟な発想を持ってチャレンジする、意欲がある方がチャレンジできる、という表現にしたい。	第2回
17	木村(秀)委員	公民連携、デジタルまちづくりは、これから市長が進めていきたい部分と考えられるが、市民の力、地域の力に関して、地域別計画を今回のこの第6次総合計画の中に入れてもらえるのか。	第2回
18	木村(元)委員	大量に小田原市から人口が流出している。これだけ減るのは、小田原市で何か課題があるからと思う。行政ではなくて、家賃や土地の値段もある。福祉サービスや防災面で安心できるが、アンケートの住みたい理由で下位、転居したい理由で上位にあることに強い相関関係があるのでは。小田原市の子育て環境がもう少しきめ細かくあれば良いのではないかと。また、景気に影響がない企業の誘致などを市長がトップセールスをして、工業団地などに来てもらうなど企業誘致をしながら、アンケートで出ているような課題に対して財政支援をしていく必要になると思う。	第2回
19	崎田委員	今回の計画の色、切り口など市民の皆さんがイメージしやすいものをうまく示す必要があるのでは。	第1回
20	崎田委員	守屋市長は公民連携、デジタルに力を入れているので、この部分をもう少し分かりやすく示すなど、市民の皆さんからしたときに、今度の計画ってあれだというイメージしやすいものをゴールと計画の間にうまくつくと、市民の浸透は図れるのではないかと。	第1回

総合計画審議会委員からの意見整理

No.	委員名	意見内容	会議
21	佐藤委員	実際に活動をする中で、小田原で活躍するためにサポートが欲しいという話はある。若者活躍という言葉は、活躍したいと思っている若者は必要に感じていると思う。全ての人に対して強制することは違うと思う。若者には、期待をしてもらった方が良く、支えてもらった方が良くという人たちが多いのではないかと思う。	第2回
22	ジェフリー委員	まちづくりの推進エンジンでは、市民の利便性を高めるためのDXについての言及があるのみ。市民の健康や交通サービスのデジタル化についても言及されていますけど、地域経済のセクションでも、地域の企業や環境に対するデジタルトランスフォーメーションのサポートを含める、あるいは言及するべきだと思います。	第2回後の書面
23	ジェフリー委員	施策12働く場・働き方:小田原地域に事業所を移転する企業のためのインセンティブシステムを研究・作成するプログラムが必要だと思います。(インセンティブには、減税や補助金などがあります)	第2回後の書面
24	ジェフリー委員	施策17歴史資産か施策11地域と共にある学校づくり:小学生向けに小田原の歴史を学ぶ教材をもっと作るべきだと思います。	第2回後の書面
25	ジェフリー委員	施策23住環境:子供のためのアクセスしやすい・楽しく過ごせる公園スペースを増やすべきだと思います。(今の公園でボールの遊びでも禁止になっているところが増えています。地域の公園少なすぎと思います。)	第2回後の書面
26	鈴木委員	15ページの2030年の姿の5段目の●について、「デジタル化が進めば、外に出る必要はない」との意見があったが、デジタル化が進んでも人間、生活していく上で、他人から見て無駄なような外出も心身の上で必要。特に高齢者にとっては移動手段の維持・確保は大切。外に出て五感を働かせる生活こそその人の人生に色がつく。肉体的にも精神的にもプラスになる。行政案の状態を活かしてほしい。	第2回後の書面
27	関委員	指標を作る時にSDGsの視点をぜひ使っていただきたい。	第2回
28	関委員	評価そのもの横断的に、連動性を持って循環をさせて評価をしていただきたい。例えば、貧困は貧困だけではなくて、教育の問題と働き方改革合わせての評価をしない限り貧困を抜け出せない、という正に社会的な大きい戦略の捉え方というのが必要になりますので、そういうものが分かりやすくなるような、少しその成果としての、政策としての評価の、ある意味で考え方みたいなものを少しご議論ができるといいかなと思いました	第2回
29	関委員	15ページの、地域経済の好循環について、3つほど視点を加えて書いていただいたりご協議をいただきたい。 1つ目はSDGs、内発的な地域内での小さなビジネスをつくるということがとても重要。企業誘致などの誘致型でなく、地域で地域の方々がそれぞれのできる範囲のビジネスを起すことが重要。 2つ目は、用語的に「工場」や「サテライトオフィス」、「誘致」は古い。例えば「ソーシャルビジネス」、「リビングラボ」など、新しい概念を入れていただきたい。 3つ目が、環境問題とエネルギーの問題。これは課題があるからこそ新しい産業に結びつく。これは農業、水、食料に関わってくるということで、大きい産業になる可能性がある。2030年までだとするとちょっと夢がないかなと思う。産業面では大胆に。若い方が夢を持てるような産業構造をつくるというようなメッセージを伝えていただきたいと思う。	第2回
30	信時委員	「推進エンジン」の扱いは、どのようにするのか説明を願いたい。 先導的な取組があり、計画と具体的なプロジェクトとの間にタイムラグが発生するが、計画づくりと同時に推進も実施みたいなことが必要ではないかと思う。 推進エンジンが、どのような位置づけになるのかが非常に重要になってくる。従来型の発想の推進の仕方だとタイムラグがあっただけ、そうなるのは事実。そうではない推進エンジンとは何かを考えていかないといけない。	第1回
31	信時委員	防災に関してですが、具体的にどういった災害を想定されているのか。防災は相手によって対策が全然違ってくる。	第1回
32	信時委員	子どもの声を聞く取り組みについて、アリバイづくりで終わらせないでほしい。ぜひ、ちゃんと声を聴いてもらうような仕組みを作った方がいい。	第2回
33	信時委員	コロナ禍において、働き方が一番変わった。IT技術の活用が可能になって、それを認めるような時代になった。小田原は良い位置にある。在宅ワークは当たり前、会社も在宅を認めるような就業規則をつくらないと人材が集まらない時代に入っていると思う。その時代においてのまちづくりはどうかを考える。 起業、個人で企業をつくる人が非常に多くなっていくと思う。経済の好循環において、起業をメインにしたほうが良いと思う。老若男女関係なく起業する人をサポートするとした方が良くないかと思う。働き方が変わる中で、まちがどう変わっていくかという方向で考えたほうが良いと思う。 地域循環共生圏が自然環境に入っているが、実は産業、金融など全部が入っている。地域循環共生圏を自然環境に押し込めるのはどうなのかなと思う。エネルギーも産業。それをどう循環させてまちづくりに資していくかという視点が良かったほうがより総合的なものになるのでは。	第2回
34	平井委員	今回の総合計画に関して、まち・ひと・しごと創生総合戦略のように、5年後の大きな道筋はある程度示しつつ、中身に関しては都度見直ししながら、見直す際に、子どもも含めて、様々なご意見を聴く体制をつくっていく。今回の計画策定で完成形ではなく、走りながら完成を目指すというような総合計画でも、これからの時代ふさわしいのではないか。	第1回
35	平井委員	計画を動かしていくプロセスの中に、子どもたちが参加できるようにご検討いただければと思う。	第2回
36	平井委員	推進エンジンそのものを言葉にするというより、「世界が憧れるまち”小田原”」に向けたもう一言、何をもってそこに向かうのかという点を絞り込んで考えていただきたい。	第2回
37	平井委員	施策ごとの大きな指標と、その下にぶら下がる小さな指標という形で、指標の間にも階層構造を作っていないと全体像が見えにくい。また、個別な議論に話が集中してしまうということも懸念される。	第2回
38	平井委員	活躍したくない人まで活躍して欲しいということではないのでは。うまく活躍出来ていないという実感ある方たちに手を差し伸べていくという考えでは。全女性、全男性、全若者に向けての話ではなくて、今そういう気持ちで持てないでいる皆さんを下支えしていくというものでは。	第2回

総合計画審議会委員からの意見整理

No.	委員名	意見内容	会議
39	平井委員	基本構想については、まちづくりの3目標にKPIを設定いただきたい。生活の質の向上は、理念が「世界が憧れるまち」であり、その具体的な内容が「行ってみたい、住んでみたい、住み続けたい」なので、市民意識調査における「ずっと住み続けたい」意識の比率に設定してはどうか。できれば、2030年の姿も、市民意識調査における「住み続けたい」理由を伸ばし、「住み続けたくない」理由を減らす方向で組み立てると、異論が少なくなるのではないかと。住み続けたい理由の決定要因を掘り下げると、お送りした概要版にあったように、60歳を境にした年齢差が最も大きく、愛着の有無や行政経営への批判意識なども作用していることがわかった。これらの分析も、施策の組み立てに生かせないか。地域経済循環のKPIは、RESAS上の域内経済循環率は100%を超えていることから工夫が必要。一案としては、産業分野ごとに区切り、飲食、宿泊、食料品、石油石炭、専門技術、情報通信など重点施策にかかわる産業の漏洩額減少を謳ってもよいのではないかと。環境のKPIは難しいが引き続き考えたい。 まちづくりの3目標については、目標間の相乗りがあるとよいのではないかと。たとえば地域経済の好循環も、企業や観光客・関係人口誘致にとどまらず、上記の「住み続けたい」理由を伸ばし「住み続けたくない」理由を減らすことに資する、つまり小田原の価値を共創する起業支援を柱の1つに押し出してはどうか。そうすると、「住み続けたい理由」の第1は「自然の豊かさ」なので、豊かな環境の継承に資する(エネルギーの生産・流通も含め)起業支援も押し出せることになる。他にも、「娯楽や余暇」を提供する起業、「便利だが不便な交通」のジレンマを解消する新たな交通に関する起業など、重点化・焦点化できるのではないかと。起業支援も賛成だが、戦略的な絞り込みが必要だと考える。	第2回後の書面
40	平井委員	3つの推進エンジンについても、すでに行政案でピックアップされているように市民意識調査の結果も踏まえた書きぶりになると異論が少ないのではないかと。若者や女性についても、立場によって活躍感が異なることは12ページに記載されており、その点を再確認すればよい。行政経営やデジタル化についても同様。	第2回後の書面
41	藤澤委員	KPIについて、基準値を活用しているが、基準値そのものはどういう性格を持つものであるのか。	第2回
42	藤澤委員	若者女性について、アクションとしては賛成。一方で、超高齢社会における担い手としての位置づけを書き込む必要はあるのではないかと。	第2回
43	藤澤委員	第6次総合計画行政案の基本構想では、くらし(生活の質の向上)、経済(地域経済の好循環)、環境(豊かな環境の継承)の3つの柱で構成されていますが、特にくらし(生活の質の向上)が目指す姿では「子育て」に焦点があてられており、枠組みが明確でないように感じます。小田原市は「SDGs未来都市」に選定されているわけですから、SDGsの特徴である「経済」「社会」「環境」で区分し(順不同)、これらに統合的に取り組むというSDGsの考え方に沿って行政施策を展開することを明確にすることが未来都市としての姿勢を示すことにつながるのではないのでしょうか。行政案では、全体的に未来に向けて責任を果たすSDGsの考え方を読み取れるところが少ないように思います。SDGsをどのように計画に反映したのか、マトリックスの星取表を資料としてつけるような従来型の取組の示し方ではなく、2030年を見据えている計画にふさわしく、SDGsの考え方をもとに計画の体系を見せていくような工夫が必要だと思われるかと。	第2回後の書面
44	藤澤委員	第5次小田原市総合計画「おだわらTRYプラン」後期基本計画では、9本の重点テーマの1つに位置付けられていた「9 基礎自治体としてのあり方の見極め」(広域連携に係る記載)が、3つのエンジンの取組の小項目の1つになっています。小田原市は県西地域の核であり、地域全体の未来を描くリーダー的立場にあると思われるかと。県西地域における広域連携についてももう少し重み付けをする必要があるかと考えます。	第2回後の書面
45	藤澤委員	第5次小田原市総合計画「おだわらTRYプラン」後期基本計画では、未病に関して「4いのちを育て・守り・支える」に位置付けられていましたが、今回の行政案ではその考え方がなくなっています。県の重点施策であり、国の健康医療戦略にも位置付けられている未病コンセプトについて、引き続き盛り込んでいただき、県、国とともに取組を進めていただきたいと思っております。	第2回後の書面
46	別所委員	「人口20万人規模」という記載がありますが、ここは根拠を明示した方がよいと思っております。必要な都市機能を自力で整備し一定の経済循環を実現するためには50万人程度の規模が必要であり、小田原市を20万人規模とする場合には小田原市を中核とする広域連合の形成が不可欠だと思っておりますがいかがでしょうか。	第2回後の書面
47	別所委員	産業創生(誘致を含む)のためには投資をする人たちへの働きかけが不可欠だと考えています。起業について金融機関との連携ということを考えている(「施策12 働く場・働き方」)ことは理解していますが、金融機関の中にベンチャーキャピタルが含まれることがわかるようにしてはどうでしょうか。また、ベンチャーキャピタルも複数の累計がありますが、シード投資をリード投資家として行っているベンチャーキャピタルとその投資先を地の利の良い小田原市に呼び込む政策が重要だと思っておりますがいかがでしょうか。(シード投資を行うベンチャーキャピタルはハンズオン支援を前提にしており、レイターステージでの投資を行うところや企業が作っているCVCとは違い目利きもしっかりしています。また、海外投資家もLPとしての参加が増えており資金力は増加傾向にあります)	第2回後の書面
48	別所委員	15ページの下から5行目に「新規事業にチャレンジしやすい環境が整い」という記述がありますが、基本構想に書き込むかどうかは別にして「新規事業にチャレンジしやすい環境」とはどのようなものであるかを明確にしておく必要があると思っております。	第2回後の書面
49	別所委員	デジタルまちづくりは、データによって世界で一番市民の課題や希望を理解している町になるということですので、個人情報保護について触れる際に合わせてその趣旨を含めていただくのはいかがでしょうか。また、行政基盤のDX化だけではなく民間の持っているデータとの連携も必要となってきますので、データ連携基盤の整備についても触れておいていただいた方がよいのではと思っております。	第2回後の書面
50	別所委員	デジタル化を進めるためには地域のネットワーク整備や必要なデバイスの普及などのインフラ整備、環境整備が不可欠ですので、そこに投資が必要となる点についても触れていただいた方がよいと思っております。	第2回後の書面
51	益田委員	KPIをどのように設定していくのか。内部の役所の中で指標を決定するのか、外部の意見を入れて決定するのか。今の時点での考え方を教えていただきたい。	第2回
52	益田委員	地域コミュニティと自治会連合、スクールコミュニティとコミュニティスクールの言葉が分かりにくい。市民ですら、区別が分かっていない状況もある。計画を立てる際に、分かりやすいように整理しないといけないのではないかと。	第2回
53	益田委員	女性だけではなく若者も同じだと思う。チャレンジや活躍できるという重荷に感じると思う。若者と女性だけではなく男性にもいえる。男性は必ず活躍しているのか、しなきゃいけないのかということ、そうではないと思う。自分が置かれた場所、自分の考えの価値観の中で考えれば良いこと。誰かに決められてということではないと思う。	第2回

総合計画審議会委員からの意見整理

No.	委員名	意見内容	会議
54	丸山委員	基本構想の中で「魅力的」「魅力」という文字が色々なところに記載されていますが、もう少し具体的に記載するか、言葉を変更してはいかがですか。(全てではありませんが)(例えば)①P14 1 まちづくりの理念と2030年に目指すまちの姿の説明文の下から3行目 小田原の魅力を最大限に・・ ⇒ 小田原市内の地域毎に合った特長を最大限に・・に変更してはいかがですか。 ②P15 (2)地域経済の好循環 1行目途中 働く場としての魅力を高め・・⇒働く場としての質を高め・・に変更してはいかがですか。	第2回後の書面
55	丸山委員	P15 ○2030の姿 ・の2つ目 働き方(テレワーク・ワーケーション)が定着し、多様なワーク・ライフ・バランスが実現されている。とありますが、多様な前に⇒併せてサービスの提供 によりを追加する。理由としては、働き方でのテレワークは今後どこでも普及してきますので、小田原独自の付加価値をつける事で、人は集まり、利用したくなると思います。仕事の効率が良いければ、早く仕事が終わる、普段より早く終わった時間を小田原市内観光やイベントへの参加で良さをアピールできるのではないのでしょうか。	第2回後の書面